

九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2026



所 属： 人文学科 児童教育専攻

名 前： 赤井 秀行

作成日：2026年5月18日

教員氏名：赤井 秀行

所属：人文学部 人文学科学科 児童教育専攻

1. はじめに

2024年度4月に本学人文学部人文学科こども専攻に講師として着任した。小学校教諭としての6年間の経験に基づき、主として教員養成に係る教育を担当している。従来の専門は算数・数学科教育であるが、今日の社会及び教育を取り巻く環境から、教育工学（主に、授業実践におけるICT活用）に軸足を移し、研究活動に取り組んでいる。本学における教育活動でも、算数教育に加え、ICT活用に関する科目を担当している。2026年4月より人文学科児童教育専攻准教授を拝命した。

2. 教育の責任

2026年度は共通教育科目を含む9科目（主担当でない科目も含む）の講義を担当予定である。加えて、教員採用試験対策講座も担当している。

(1) 授業科目の担当

2026年度は、以下の科目を担当予定である。

科目名	開講時期	履修者数（25年度）	備考
算数科教育法	後期	48	専門教育科目
算数（3限）	後期	33	専門教育科目
算数（5限）	後期	32	専門教育科目
ICT活用指導論Ⅰ	前期	55	専門教育科目
小学校教育実習Ⅰ	通年	41	専門教育科目
小学校教育実習Ⅱ	後期	41	専門教育科目
特別研究	後期	未定	専門教育科目
卒業研究	通年	8	専門教育科目
情報基礎	前期	85	共通教育科目

■ 主要授業科目

算数

小学校算数科教育の実践には、基本的な数学的素養が必要となる。本講義ではその育成をねらいとして、算数科の5領域（「数と計算」「図形」「測定」「変化と関係」「データの活用」）の指導内容の数学的背景に関する講義・演習を行う。さらに、算数と数学をつなぐ視点から、算数科の指導内容の本質についてグループワークや課題を通して考察する。

算数科教育法

数学的な見方・考え方を働かせ、学習した内容を生活や学習で活用するための「数学的に考える資質・能力」を育成する算数科教育を講義のテーマとしている。算数科の5領域

(「数と計算」「図形」「測定」「変化と関係」「データの活用」)における指導法に関し、様々な理論や児童の認識・つまずき等の観点から講義・演習を行うとともに、模擬授業によってその実践的指導力を高める。

ICT 活用指導論 I

学校教育における情報通信技術 (ICT) 活用について、これまでの歴史的経緯、現状、そして今後の方向性について考察する。学習指導における教師・児童の ICT 活用に加え、教材研究・授業の準備、学習評価及び校務における ICT 活用についても講義の題材として取り上げる。講義の中では、とりわけ授業実践における ICT 活用を体験し、その意義を考察するとともに、指導アイデアの設計等の演習を行う。なお、ICT 活用指導論 II とのカリキュラム上の接続を意識し、本講義では理論面を中心とし、それを踏まえた実践的指導力の育成を II で行うという構成をとる。

小学校教育実習 I 事前・事後指導

小学校教育実習に向けた事前指導として、「教育実習の意義と目的」、「教育実習生としての心得」、「学校行事の運営等への参加の在り方」等について講義を通じて、学生が見通しを持てるよう指導する。またグループに分かれての、学習指導案作成・模擬授業・授業参観を通じて、学校現場での実践的指導力の素地を養う。実習終了後は、事後指導として、教育実習報告会や教育実習の反省、課題整理等を行い、「現在の教員には何が求められているのか」、「教員としての適格性を持つためにどのような努力をしていけばよいのか」等について省察と協議を行う。

小学校教育実習 II

本科目は各学校における教育実習活動であり、実習校の教育実習計画に基づき、「オリエンテーション」「講話」「授業観察」「指導案作成及び授業実践」「学級経営」「日録の作成」等の活動を主とし、学校教育の実際に関する体験的・総合的理解及び、学習指導や学級経営、生徒指導等の様々な場面における教員としての資質・能力の育成を図る。実習においては、小学校と連携し、研究授業に際しての巡回指導等を行う。

■ 非常勤講師

数学教育教育教材開発研究：鳴門教育大学大学院（2021-現在）

(2) 教育組織運営

2023 年度より、広報委員長を務めている。そのほか、グローバルセンター運営委員会・ICT 教育部会・実習委員会の委員を務めている。

3. 教育の理念

確かな理論に基づく専門性と柔軟な実践力を兼ね備えた教員の養成を目指し、教育を行っている。専門性と実践力は独立したものではなく、相互に関連しあうものである。よって、

日々の教育活動において、個々の学生がそれらを相互に関連付けることができるようになるための教育を目指している。また、社会の仕組みが大きく変化する現代の状況において、教員にも定められた問題に取り組むのではなく、自らが問題を発見し解決する力がもとめられる。そのため、問題発見及び解決を重視する教育を目指している。

(1)理念1 【理論と実践の往還】

講義においては、学ぶ理論が実際の教育現場・教室でどのように表れるのか、又、実際の教育現場・教室における事象をどのような理論を通して解釈するかという視点を重視する。

(2)理念2 【アクションリサーチの視点の育成】

今日求められる「学び続ける教員」としてのとしての資質能力を念頭に、教育現場における実践家であるとともに、研究者としての分析的視点を有した教師の育成を目指す。

(3)理念3 【時代の変化に適応した教員の育成】

ICT の幅広い活用を前提とした社会・教育現場で活躍することを念頭に、ICT 機器を基盤としたコミュニケーション及び問題発見・解決の過程を重視する。これは、学生自身の学び方と、学修内容（教科指導法等）の両面において意識する。

4. 教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

(1)学校現場における研究会等への学生の積極的参加

「理念1」に関し、限られた講義の中だけで、理論と実践の往還を実現することの難しさを日々感じる。そのため、講義内容に関連した、学校現場における研究発表会等の情報を多く学生に提供し、その参加を促している。24年度には、専攻の他教員とも協力し、多くの学生が授業研究会・研究発表会に参加した。

(2)「原因と結果」・「手段と目的」という視点を重視した課題の設定

「理念2」に関し、特に児童・生徒とのかかわりに関する講義内容について、その「原因と結果」・「手段と目的」について「分析的に考察」という視点を重視している。例えば、ある児童の誤答について取り上げ、「その原因となるミスコンセプション」と「それを解決する指導法」、さらに「その指導法はなぜ対象とするミスコンセプションに有効なのか」という点を学生が分析的に考察する演習や講義を行っている。学生に知識を一方向的に指導するのではなく、「原因と結果」・「手段と目的」といった視点を構築していくことにより、教育現場に出た際に直面する多種多様な児童の実態に対して分析し、対処する力を育成することをねらいとしたものである。

(3) 情報通信機器の積極的な活用

「理念3」に関し「学生の学び方」という観点から、講義中におけるタブレット・ノートPC・スマートフォンの活用を促し、コミュニケーション・情報収集・記録などの多様な手

段として活用できるようにしている。また、講義資料も ICT 機器と親和性があるように作成した。とりわけ、Google Classroom・ロイロノートといった学校現場でも広く用いられているツールを積極的に活用することで、自身の講義における学びの促進に加え、学生がそれらのツールに慣れ親しむこともねらいとしている。

5. 教育改善のための努力

(1)改善努力1 授業に関する要望を取り入れる機会の確保

授業評価アンケートの結果や、それによる要望を踏まえた改善は、翌年度以降の成果としては期待できるが当該科目を受講している学生には反映することができない。そのため、自身の担当する講義では、7回目に学期中の授業評価アンケートを実施し、学生が無記名で講義への要望などを行う機会を設定している。

(2)改善努力2 予習を取り入れた学修形態

限られた講義時間の中で、学生・教員間の協働的な学びにかける時間を確保するため、一部の科目では予習動画を取り入れている。予習動画では知識の教授等、一方的な講義になる部分を15分程度にまとめ、事前に視聴することを求めている。講義ではその事前学修に基づき、具体的な問題解決に関する活動を設定している。

(3)改善努力3 学生の提出物へのフィードバック

学生は、自身の提出物等への評価やその根拠が分からない時、講義について大きな不安感を感じる。そのため、日々の小課題についても、原則として翌週までに採点し、フィードバックをするようにしている。また、課題ではない感想などについても、コメントを返したり、次回講義の冒頭で取り上げ、コメントしたりする。特に、講義冒頭で、学生の振り返り・感想について教員がコメントしたり、学生で協議したりする機会を設けることで、徐々に、学生の振り返り・感想の視点が深まっていくことを実感している。

6. 教育の成果・評価

毎年、概ね高い評価を得ている。2025年度では、単独担当する科目である算数・算数科教育法・ICT活用指導論Iにおいて、授業評価アンケート全10項目の評定値が4.5(5点満点)を上回っている。また、講義の総合的な評価である「全体として、この授業はあなた自身に役立つものでしたか」という項目について、算数科教育法及び算数では、4.7を上回った。

7. 今後の教育に関する課題と目標

自身は主として学習指導に関する科目を多く担当している。GIGAスクール構想以降、学校現場における学習指導の在り方は急速に変化しており、そのような変化に対応できる教員養成が大きな課題である。そのためには、自身の研究活動をより一層進め、その成果を日々の教育に還元することが肝要であると考えている。

また、コロナ禍の終息により、自信が学校現場と関わる活動が多くなっている。その中で

構築された学校現場との関係性を活用し、学生が学校現場に関わることのできる機会を多く創出することも自身の課題であり、目標である。

【根拠資料】

・担当科目シラバス

算数・算数科教育法・ICT活用指導論Ⅰ・小学校教育実習Ⅰ・Ⅱ

・2025年度後期授業評価アンケート

算数・算数科教育法・ICT活用指導論Ⅰ